

令和8年
畜産環境シンポジウム

糸島地域における 未利用資源活用の兆し

耕種農家の立場から
地域資源が農業のサイクルの中で
少しずつ回りはじめた20年弱の歩み



福岡県糸島市二丈松末
株式会社 百笑屋 松崎 治久

はじめに

完成した成功事例ではありません



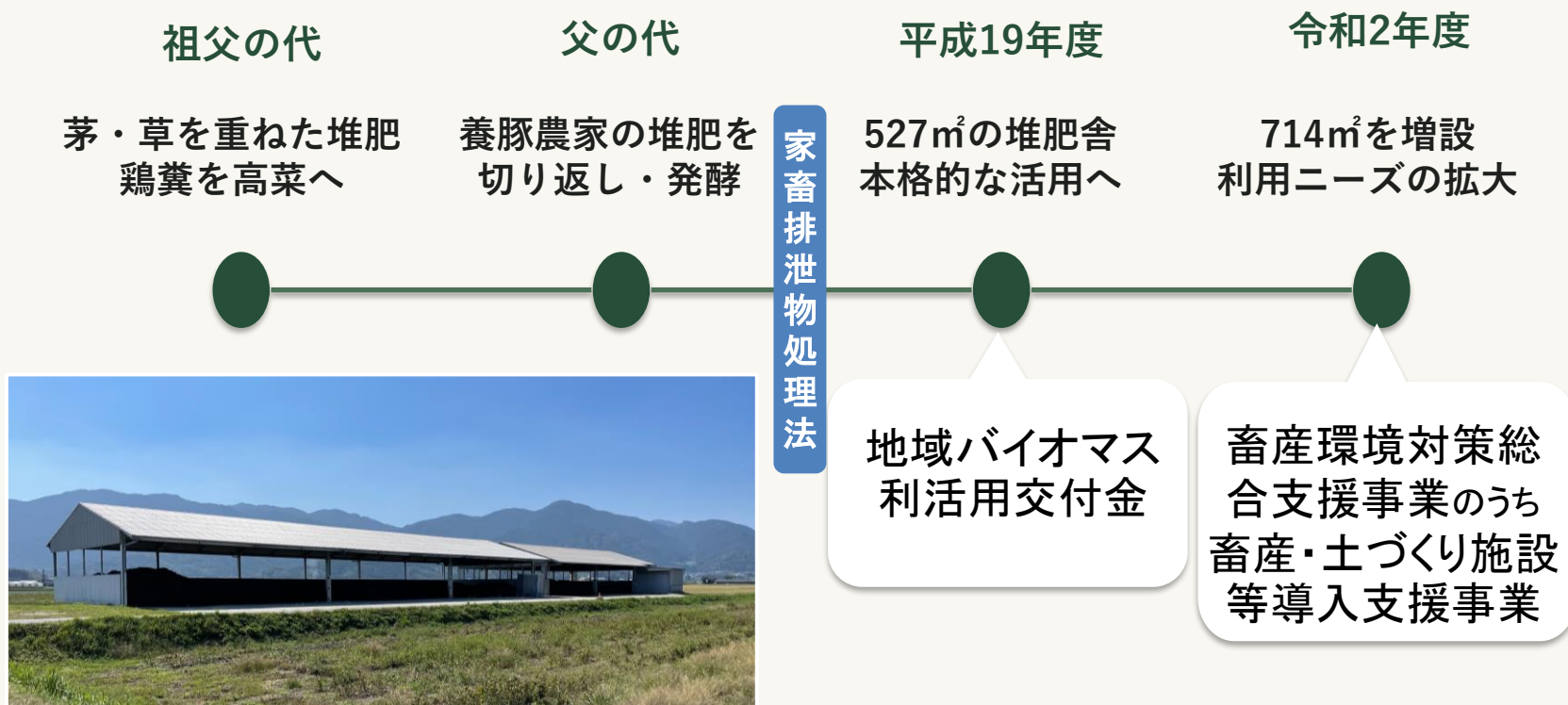
水稻
29.1ha

麦
48.2ha

大豆
6.25ha

糸島で、十分に活かされなかった資源が
農業サイクルの中で回りはじめた。

始まりは「資源循環」ではなく、土づくり



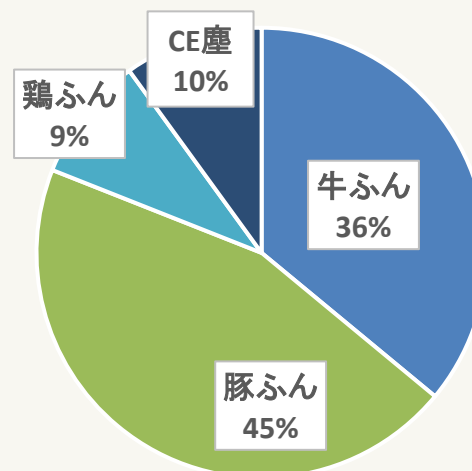
「堆肥を入れると土が良くなり、収量や食味が向上する」
という理想像が原点でした。

半径約10km圏内、13戸の畜産農家から



水分量を見ながら受け入れ割合を判断
おおむね 1～3月・7～9月に受入れ

おおむねの割合



成分	窒素	3.90%
	リン酸	7.25%
	カリ	3.56%
	CN比	8.26%
	水分	30.9%

設備はシンプル。手をかけて、完熟へ

01

受入れ



02

水分調整

03

切り返し



04

発酵

05

完熟



ブローア等は設置せず、2週間に1回を基本に切り返し。
発酵補助として「タヂカラ」を希釈散布しながら完熟へ

完成すれば、怒涛の堆肥散布

水稻

23.5ha

堆肥散布面積

約700t/年

大豆

4.2ha

堆肥散布面積

約85t/年

麦

25.8ha

堆肥散布面積

約500t/年



合計 約53.5ha / 年間 約1,285t



「積む・運ぶ・撒く」が、利用拡大の壁

115ps

+ 5t

75ps

+ 3t

58ps

+ 2t

遠隔圃場

堆肥舎

ダンプ
輸送

積み替
え

散布

圃場条件に応じて3種類を使い分け



キャリアブリッジ

「散布するのがねー！」
ここが現場のハードル

堆肥を使った結果、施肥体系が変わった

水稻

29.1ha



13.28ha

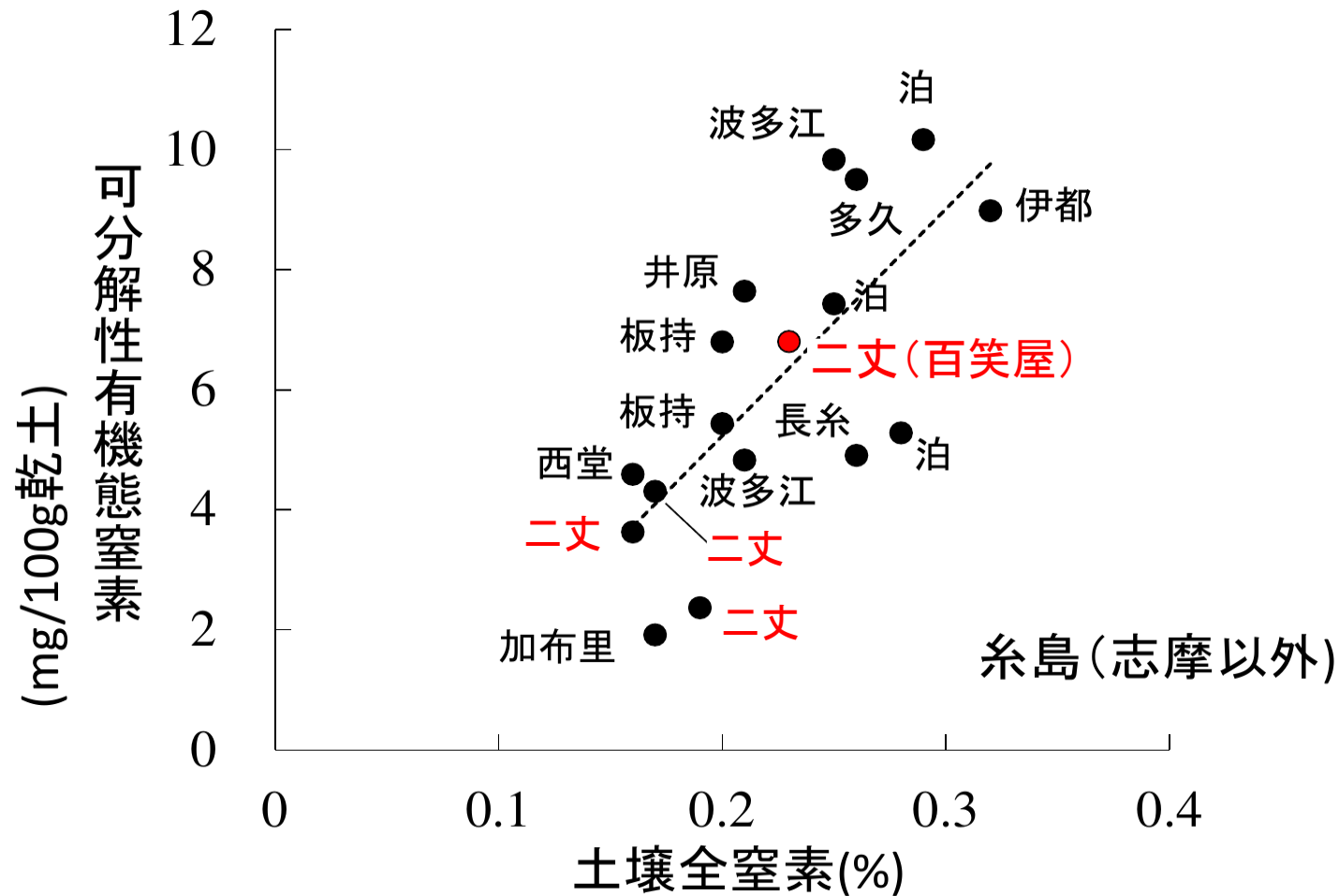
元肥ゼロで栽培

約50%

水稻全体の元肥使用量
を削減

堆肥を「処理するもの」ではなく
施肥設計の中で使う資源へ。

堆肥等の有機物施用により可分解性有機態窒素は増加



堆肥か、化学肥料か二者択一ではなく

可分解性有機態窒素が
地域平均より高いと
確認された

——

化学肥料ゼロを
目的化しない

病虫害・生育・圃場条件を見ながら必要な資材は使う。
地域・圃場・年次に応じて組み合わせる。

“正解”より、順応性

新しい循環の「兆し」

1

地域農家へ

2戸・約2ha
約40t

2

小さく使う

ペレット化
1kg袋で販売



3

放置竹林

樹木粉碎機
竹チップ



4

葡萄や大豆が
戻る

ワイン・醤油
の搾りかすを
堆肥へ



地域を見渡すと、農業につながる可能性を
持った資源はまだある。

「捨てる前提」を、循環へ

葡萄栽培

苗木・成木に



ワイン醸造

原料として



“未利用資源”は、見方を変えると次の原料になる。



堆肥

再び農地へ



搾りかす

百笑屋へ戻る



これが、今回タイトルに
「兆し」という言葉をつかった理由です。

完成形ではない。
でも、地域の中で循環はうごきはじめている。

糸島地域における未利用資源活用の兆し

正解となる農業の形は、地域によって変わる

気候

土壌

作物

地域資源

農地条件

人のつながり

**他地域の優良事例から学びながら、
その時代・その地域の変化に順応していく。**

必要なのは「ひとつの正解」ではなく、順応性。

私たちは、

中継ぎ投手です。



受け取ったものを、今の時代に合わせて少しずつ良くし、次へ。

地域に学び、地域に順応し、次の世代へ

百笑屋の取組みも完成形ではありません。
糸島の中で見えてきた一つの可能性として
これからも模索し続けます。



ご清聴ありがとうございました。

